





# 説教・講話・書簡等の抄記

## 告白は謙遜に、完全に、生活を改める決心と共に

(…すでに赦しの秘跡についてでは教理、修徳、心理の面から考えてきました。)

今回は、全体から見れば一部ではありますが、聖なる赦しの秘跡を受ける側から見たいくつかの側面について、わかりやすく述べてみたいと思います。告白する人は、秘跡としての告解において生まれ変わり、強められ、キリスト者として聖性を目指して生きることができるようになりますし、そうでなければなりません。それはすなわち、教会の中で実践されている、父なる神と兄弟姉妹の人々への超自然的愛を目指す生き方でもあります。

告白と和解の秘跡である赦しの秘跡では、誰もが自分の人生をかえりみて、福音にあるあの税吏を思い出さずにいられないでしょう。「税吏は離れて立ち、目を天に向けることさえせず、胸を打ちながら、へああ、神よ、罪人の私をおあわれみください」と祈った。私は言う。この人は義とされて家に帰った

が、先の人はそうではなかった。高ぶる人は下げられ、へりくだる人は上げられる。」(ルカ18・13、14)

神の御前で自分のみじめさを認めても、品位が下がるわけではありません。むしろ真の自分にふさわしく生きることになり、悪や弱さのすえ罪に陥った後で真実の平和と恩寵を手にするのができます。それは、憐れみと誠意に満ちた神との生きた交わりに入り、最高の心の平和を得ることです。(…)

みことばが告げる真理は私たちに主に近づけると共に、なぜ秘跡としての告白が、単なる心理的な衝動から生じたり、それに伴うものであつてはならないのか(秘跡は精神療法ではありません)、またなぜ告白が超自然的な動機に基づく心の痛みによるものでなければならぬかを教えてください。

罪は最高善である神への愛を壊してしましますが、罪こそが贖い主を受難に会わせ、私たちから永遠の善を奪い取ったのです。

です。

告白は謙遜に、余すところなく

このように見ると、いかにも告白が謙遜で完全なものでなければならぬか、これからは生活を改めるという堅い決心が伴わねばならないか、さうらに良い決心は必ず実現できるという信頼感を持つべきであるかがよくわかるでしょう。

謙遜がなければ、糾明などいぜい使えない罪の一覧表が、悪くすると、罪を犯す権利があつたという傲慢な主張に終わりかねません。これは神に反抗した天使たち、人祖とその子孫たちがおちいった「仕えなまこと謙遜とは、悪を忌み嫌うことでもあります。私は自分のとがを認める。私の罪はつねに私の目の前にある。あなたに向かつて私は罪を犯し、御目の前に悪事を行なつた。あなたが宣告される時、その宣告は正しく、さばかれるとき、そのさばきはあやまりがない。」(詩篇51・50、51、6)

告白は完全でなければなりません。トレント公會議ではつきりとうたわれているように、「すべての大罪」を告白しなければならぬのです。それは単なる教会の規律ではな

く、神法による要求です。主が秘跡をそのようにお定めになつたからです。「告解の秘跡の制定について、全教会は常に次のように解釈してきた。すなわち、洗礼後に罪を犯した者には、すべての罪を完全に告白することが神の法によって必要であると主が制定した。われわれの主イエズス・キリストは、地上から天国へ昇る前に、司祭たちを自分の代理人、指導者、裁判者として残した。キリスト信者が犯した大罪は、すべて司祭に言い表わさなければならぬ。」(DS, 1679) 規定7と8で述べています。「7条。罪の赦しのための告解の秘跡において、十分な準備によつて思い出したすべての大罪と一つ一つの大罪、十戒の最後のふたつの掟に反する隠れた罪、罪の種類を変えらる事情とを告白することは神法によつて要求されていないし、そうすることは告白する人を教育し、慰めるためであり、それは昔は教会法上の償いを決めるためにだけ使われたものである」と言う者、すべての罪を告白しようとする者は、神の憐れみが介入する余地を残さないと言う者、そして最後に小罪を告白してはならないと言う者はすべて排斥される。」(DS 1707)

「8条。教会で行なっているように、すべての罪を告白することは不可能であり、信心深い人はこのような人間的伝統を廃止しなければならぬ」とか、性別を問わずすべてのキリスト信者は、ラテラン公會議の教令によつて定められた1年に1回の告白をする義務はないとか、四旬節中の告白をしないようにキリスト信者に納得させなければならぬとか言う者は排斥される。」(DS 1708)

一つには、道徳的価値を「基本的選択」と呼ばれるものだけに狭めるような誤解から、また道徳法の内容を、善行を勧める教訓(しばしば他の罪は度外視されている)に限定することから、そして恐らくこれが最も大きな原因でしようが、「神の子らの自由」を勝手に解釈し、それを教会から切り離された私的・内密なものであるとする主張から、多くの信者がトレント公會議で定められた意味での完全な大罪の糾明をすることなく、赦しの秘跡にあずかっているのは残念なことです。時には、聴罪司祭が「完全に言い表わす」という規定に従つて必要な質問をすると、神聖な良心に踏み込む越権行為だとばかりに反発されることもあります。誠実に記憶をたどつて

く、神法による要求です。主が秘跡をそのようにお定めになつたからです。「告解の秘跡の制定について、全教会は常に次のように解釈してきた。すなわち、洗礼後に罪を犯した者には、すべての罪を完全に告白することが神の法によって必要であると主が制定した。われわれの主イエズス・キリストは、地上から天国へ昇る前に、司祭たちを自分の代理人、指導者、裁判者として残した。キリスト信者が犯した大罪は、すべて司祭に言い表わさなければならぬ。」(DS, 1679) 規定7と8で述べています。「7条。罪の赦しのための告解の秘跡において、十分な準備によつて思い出したすべての大罪と一つ一つの大罪、十戒の最後のふたつの掟に反する隠れた罪、罪の種類を変えらる事情とを告白することは神法によつて要求されていないし、そうすることは告白する人を教育し、慰めるためであり、それは昔は教会法上の償いを決めるためにだけ使われたものである」と言う者、すべての罪を告白しようとする者は、神の憐れみが介入する余地を残さないと言う者、そして最後に小罪を告白してはならないと言う者はすべて排斥される。」(DS 1707)

# 説教・講話・書簡等の抄記

思い出せるかぎり罪の種類と数を告げるという規定は、やみくもに科せられた重荷ではなく、由と平安への道であることを、このような人々も納得してくれよう願ひ、祈っています。

## 生活を改める決心と痛悔

● 自明のことですが、罪の糾明はもう二度と罪を犯さないという真剣な決心を伴わなければなりません。この意向がないとまことの痛悔もあり得ません。これ自体が道徳的な悪に関する問題であり、あり得る悪に反対する立場を取らないなら、悪を忌み嫌うことにはならず、痛悔もしていないということとです。しかし、痛悔が神に逆らったことへの悲しみから生じる時、罪を避けようとする意志は神の恩寵に基づいています。神は誠実に振る舞おうと努力する人に対して、恩寵を拒むことはありません。

もし私たちが自分の力にだけ頼るなら、罪を犯すまいという決心はキリスト教ストア主義に近いものになるか、ペラジウス派の再来になりかねません。人間の真理に反することになるのです。あたかも主に向かつて多少とも意識的に、神なんか必要ないと言っているようなものです。さらに、心から痛悔してい

るということと、将来はどうなるかを知的に判断することとは別問題であることを念頭におく必要があります。二度と罪を犯すまいと真剣に考えていても、過去の経験や人間としての弱さの自覚から、再び罪に陥る恐れを抱くことは大いにあり得ます。でもこの恐れが、罪を避けるため祈りに支えられて、できる限りのことをしようとする意志に結びつくなら、意向の真実性が損なわれることはありません。

## 罪への嫌悪とへりくだった糾明、もう罪を犯さないという堅い決心に伴うべき信頼について考えてみたいと思います。

● 信頼があれば超自然の希望に達することができ、この希望があればこそ神の好意を当てにすることができ、神の御約束と救い主イエズス・キリストの功徳を通じて永遠の生命とそれを得るための恩寵を期待することができ、それは、神に造られた私たちが示すべき尊敬の行為でもあります。神は私たちを全ての被造物にまさって本質的に品位あるものと定め、恩寵へと引き上げ、憐れみ深く贖ってくださいました。ですから私たちは全力を尽くします。信頼のない所には、凍りつくような冷たさと疑いしかありません。

● これに関連して、福音書にはこの上なく価値ある教えが見られます。それは悲劇に終わったユダの裏切りと、救いをもたらしたペトロの償いで、ユダの後悔を福音書は明確に述べています。「裏切り者のユダはイエズスへの判決を聞いて後悔し、司祭長と長老たちにあの三十枚の銀貨を返し、へ私は罪なき者の血を売って罪を犯した」と言った。(マテオ27・3〜4) しかしユダは後悔したものの、まさに裏切りの瞬間にイエズスが彼に言った言葉「友よ」(マテオ26・50)が思い出せなかったようです。彼は

● 信頼することができず、自ら命を絶ってしまいました。ペトロは実に三度も、重大さにかけては引けを取らない過ちを犯しましたが、彼は信頼し、復活のあと三度にわたる愛の償いによって、キリストから受けた使命を確認しました。聖ヨハネは素晴らしい言葉で私たちの希望の理由と力、その甘美さを伝えてくれます。「私たちは神の愛を知り、それを信じた。神は愛であり、愛を持つ者は神にとどまり、神は彼にとどまられる。」(Iヨハネ4・16)

● 私はいま目の前にいる皆さんに話しかけながら、世界中の全ての司祭たちに思いを馳せています。この考察は司祭の使命のためのものです。秘跡として信者たちの告白を進んで聞くのみならず、ミサの説教や要理教育、霊的指導その他あらゆる方法で真理を伝える使命を果たし、信者が良い心構えで救いの秘跡という大いなる神の憐れみの賜を活用しよう教えることができればと思います。同じ恩寵を、兄弟たちの中の兄弟として自らの罪を改め、悔悛者として同じ秘跡にあずかり、聖性をみがくべき私たち自身のため、主に願ひます。(…)(九六・三・二二)

## 現代の典礼刷新を考へる

### (教皇庁典礼秘跡省の総会でのお話)

★ (…) 全体的に見れば、典礼とは、特に聖体祭儀において、全教会共同体の目指す頂点であると同時に神の栄光を賛えるための原点です。もちろん信者もそれぞれ自分の生きていく状況の中で積極的に聖化にあずかることで、神の賛美に声を合わせます。ですから典礼は、もともと現代人の期待に応

えるもの、異なった文化にもたやすく適合できるものとなるべきです。

### 真の深い典礼刷新が必要

この点について、以前私が使徒的書簡「紀元二千年の到来」で第二バチカン公会議に関して「もともと広い見地から述べたことは、典礼、とりわけローマ典礼

についても当てはまることを思い出してください。「第二バチカン公会議はしばしば、教会の生命力の新時代の始まりと見なされます。事実そのとおりですが、同時に、この公会議がその直前の経験や思想、特に教皇ピオ十二世の知的遺産に多くを負っている事実は見逃せません。教会の歴史では、「新」と「旧」がつねに密接に織り混ざっています。新は旧より芽生え、旧は新においてより豊かに表わされます。」(「紀元二千年の到来」18番) 典礼刷新は教皇ピオ十世の努力にさかのぼる、長い間の思索の結実である

ことを忘れてはなりません。ピオ十二世の回勅「メディアートル・デイ」（来年は発布五十周年です）からも大きな刺激を受けています。

第二バチカン公会議の前も公会議中も、公会議の後ろだてを得て進んだ典礼刷新の間も、典礼生活のために行なわれた全てのことは「典礼の精神」の定着を助け、それをもとに典礼行為の中心的な意義を適切に理解させることを目的としました。

もちろん、単なる改革では典礼の精神を回復させることはできません。真の、深い典礼刷新が必要です。実際、「精神」は本質上、典礼の「行為」と結び付いており、典礼を行う「人間」すなわち「キリストの司祭職を行使する」よう召された人間の内にしか存在し得ないのである。とは言え、キリストの司祭職の表現や行使の仕方を無視してはなりません。これら「外的なしるし」は、典礼を考える上で見逃すことはできません。

★ 第二バチカン公会議は現代人の期待に応え、使徒書簡「東方の光」で言及したように「言葉と行ないをもって教会の伝統が有する無限の富を現代に示す」よう信者たちに求められています。(n.4, AAS, 87 [1995], 748) そうした「宝庫」の一つが

ローマ・ミサ典書（ラテン語の第三版は現在準備中）です。その中で、聖務日課（教会の祈り）はローマ典礼に全世代の信仰体験を保存しています。次第にキリスト教文明へと移っていった諸文化の特徴的な姿も、そこには多く含まれています。

典礼改革は、今まで各時代に教会の歴史の中で起こったことを現代の状況や必要に合わせてさらに大規模に、また異なった方法で実現させようとしています。例をあげれば聖チリロとメトジオの並外れた司牧上の事績です。「刷新が満足すべきものと称され、十分に理解可能となるのは、キリストの言葉が様々な民族の間で語られ、人々が各自の言葉と表現で聖書を読み、典礼を捧げるようになった時です。」（「東方の光」7番）

一致が必要

★ ローマ・ミサ典書第三版は、今回の典礼刷新の特徴を考へる機会となります。使徒的書簡「主の晩餐」に書いたことを思いだしてください。幸い、刷新の現段階で、ある種のいわゆるクリエイティブな自由が認められる可能性があります。しかしこのような自由も、一致の重要性と必要性をしっかりと尊重しなければなりません。

ローマ・ミサ典書第三版は、今回の典礼刷新の特徴を考へる機会となります。使徒的書簡「主の晩餐」に書いたことを思いだしてください。幸い、刷新の現段階で、ある種のいわゆるクリエイティブな自由が認められる可能性があります。しかしこのような自由も、一致の重要性と必要性をしっかりと尊重しなければなりません。

ません。私たちが多元性への道（典礼に各国の言語を取り入れるために始まった）を歩むことができるのは、聖体祭儀の根幹をなす部分が保たれ、最近の典礼刷新で定められた基準が守られている限りにおいてです。」(12番、AAS, 72[1980], 143) 「努力を結集させねばなりません。第二バチカン公会議が予見したように聖体礼拝が多様化する中で、聖体が生るしであり源であることが確認され、明らかに宣

言されるために。」(同上) 私は皆さんが典礼法規への最大限の忠実を保ち、第二バチカン公会議が成文化した原則を全ての人に示しておられることをよく存じています。「聖なる典礼の規制は、教会の権威だけに依存している。この権威は使徒座にあり、また、法の規定によつて司教にある。…したがって、他の何人も、たとえ司教であつても、自分の考えで、典礼に何かを加え、除去し、変更し

てはならない。」(典礼憲章22番) ★ ですから、選択可能な事柄に関しては専門家の意見も有効ですが、典礼に関する決定は教会権威の直接の責任下にあります。その目的はただ一つ、人々が典礼に参加して神を賛えるよう促すと共に、全ての信者のため聖化の機会をもつと近づきやすく、実り豊かなものとする事なのです。(…)(九六・五・三)

# 女性の尊厳を守る

教会シリーズ 36

1 今回のテーマは、特に教会における女性の役割についてです。女性は教会の中で重要な役割を担っていますし、現在と未来の希望は女性にかかっている、また、希望をかけられるべきだからです。今日、女性の人格の尊厳を尊び、まことの男女同権を認めることによつて、女性が社会のあらゆる分野で自らの役割を果たすための十分な機会を与えられるよう願う声が高まっています。女性の解放や地位向上を求め

る運動について考えるに当たり、教会は創造主の御目から見た男女一人ひとりの価値と尊厳に関する啓示の教えに照らし合わせて、救いのわざにおいて女性に委ねられた役割を土台にして考えます。ですから女性の価値の認識は、全ての人に価値があるというキリスト教の認識を根拠として、社会と文化をよく知っています。社会と文化の状況も、この認識に有利に働いています。さらに聖霊に照らされて、啓示の内に含まれた神の

2 キリスト教人間学によれば、全ての人に尊厳があります。女性は一人の人間として、男性と同様に尊厳を備えています。しかし過去にしばしば、男性の利己主義によつてモノのように扱われることがありました。それは今日でもあまり

女性は神の似姿

ご計画の意味を少しずつ、より深く理解することができるとしよう。福音の中に見出さなければならぬのは「神の意図」です。「神の意図」という観点から、信徒—とりわけ女性の生活の価値を考えねばなりません。そうすれば、福音を広め、神の国の到来を目指す教会の仕事に貢献する道が見つかるでしょう。

# 不変の教え

変わっていません。何がそのよ  
うな状況をもたらすのか、多く  
の文化的・社会的要因を冷静か  
つ客観的に見てみましょう。そ  
うすれば、それが支配欲や傲慢  
(ごうまん)のもたらす結果で  
あることがすぐわかります。女  
性と子供がその犠牲になってい  
ます。今日、さらに状況は悪く  
なっています。「信徒の召命と  
使命」で述べたように、それは  
「人間を物、売買の対象、利己  
的関心や快楽の追及のための道  
具とみなす不当で有害な考え  
方」(49番)から生じるのです。

抑制のない消費主義を助長す  
るフィルムや宣伝に表われた場  
合であっても、信者はそのよう  
な精神と戦わなければなりません。  
女性も、尊厳を損なういか  
なるものとも妥協などせず、人  
間としての本質を敬うよう要求  
する義務を負っています。

**3** また、同じ人間学に基づ  
き、教会は尊厳と基本的  
権利において女性と男性は平等  
であり、その原則を全てにおい  
て徹底させなければならぬとい  
てはつきりと語っています。  
これに注目するのは興味深いこ  
とです。アダムとエバの創造を  
記す最初の箇所(創世2・4・  
25)で、女は神によって男の  
「あばら骨」から造られたと記

されていますが、他の被造物と  
は異なり、同等のレベルで交わ  
ることのできる「もう一人の自  
分」として、女は男に並んで位  
置づけられています。同じ視点  
が創造を語るその他の箇所(創  
世1・26・28)にも記されてお  
り、神のかたどりとして造られ  
た人間は「男と女」であるとい  
う宣言がすぐあとに続きます。

「神はご自分にかたどって、人  
間をつくりだされた。人間を神  
のかたどりとし、男と女につく  
りだされた。」(創世1・27、  
「女性の尊厳と使命」6番参  
照)男と女は異なった性です  
が、本質的に互いに補足し合う  
ものです。聖書の著者は、女は  
男と同様に神の似姿であるが、  
男との共通点のみならず、女と  
しての特質をもつて、神のかた  
どりとして造られたことを強調  
しています。相違のうちに平等  
であるということです。(「カ  
トリック教会のカテキズム」  
30番参照) 従って、女性にとっ  
て完全であるとは、女性として  
の特質を失って男性と同じにな  
ることではありません。それ  
は、男性と平等であるけれども  
異なった存在として、女性であ  
ることなのです。市民社会にお  
いても教会においても、女性の  
平等性と相違性は認められなけ  
ればなりません。

相違しているとは言つて  
も、反発するということ  
ではありません。同じ聖書の創  
造の記述にあるように、男女の  
協力は人間の発展と宇宙の支配  
の必要条件です。「生めよ、ふ  
えよ、地に満ちて、地を支配せ  
よ」(創世1・28)と創造主は  
仰せになりました。そこで教会  
は「人間の社会的次元の第一の  
基礎的な表われは、夫婦と家庭  
である」(「信徒の召命と使  
命」40番)と主張します。この  
世の秩序の刷新は男と女の協力  
に依存しているということです。

**4** 創世の書のその後続く  
記述が示すように、神の  
計画における男女の協力は、新  
しいアダムと新しいエバのつな  
がりを考慮にいれて、より高い  
レベルで表現されなければなり  
ません。事実、原福音(創世  
3・15参照)では悪魔と女性の  
間に敵意・敵対が置かれていま  
す。悪魔の一番の敵である女性  
は、神の一番の味方なのです。  
(「女性の尊厳と使命」11番参  
照)福音を参照すれば、この女  
性の姿に処女マリアを認めるこ  
とができます。しかし、創世の  
書の中に女性全般に関する真  
理―女性は神の無償の選びに  
よって、神の契約の重要な役割  
を受けるまでに高められた、と  
いう真理を読み取ることもでき

るのです。神の国のヒロインで  
ある多くの聖女たちの姿にこの  
真理が見い出せますが、善に奉  
仕する女性の働きは、人間の歴  
史と文化の内にも明らかに示さ  
れています。  
マリアはキリストの  
救いのわざに協力した

人間の価値、女性の使命  
の価値はマリアにおいて  
はつきりと示されました。最初  
の瞬間からマリアが「恩寵に満  
ちた方」であり、罪をまぬがれ  
ていたことは、マリア論の基本  
的(根本的)な面が有する人間  
学的なねうちを考えるだけで確  
信できます。神の恵みは「すべ  
てのうちで祝福された御方」に  
豊かに与えられました。その恵  
みはマリアから全ての女性へと  
反映されました。(「救い主の  
母」7・11番参照)  
神が人類と結ばれた契約が、  
マリアに委ねられたのです。マ  
リアは人類の名において、救い  
主の到来に同意する任務を負い  
ました。今でもこの役割は、女  
性の全ての権利主張にまさって  
います。マリアは人類史におい  
て、人間的には考えられない傑  
出した方法で仲介を果たしまし  
た。マリアの同意は全人類の運  
命を変えたのです。  
さらにマリアはイエズスを生

み、育て、隠れた生活において  
は身近にあつてイエズスの使命  
遂行に協力し、公生活の間は、  
救い主の奇跡の力を示すことにな  
ったカナでしたように、その  
御働きをつつましく支えて協力  
しました。「取り次ぎによって、  
メシアであるイエズスの多くの  
しるしの最初のを招来した」  
のはマリアでした。(教会憲章  
58番)マリアはキリストの贖い  
のみわざにおいて、その使命を  
準備しただけでなく、救いの犠  
牲全体にあずかることによって  
キリストに協力したのです。  
(「救い主の母」3・5番参照)

**6** 今日でもマリアの光は全世  
界の女性たちの間に輝い  
ています。今も昔も変わらぬ女  
性の問題を受け入れ、全ての人  
が女性の尊厳と権利を理解し、  
認めるよう導いてくれます。女  
性は特別の恩寵を受けていま  
す。その尊厳と使命において、  
神との契約のうちに生きるため  
の恩寵を受けています。一人ひ  
とりの道で、素晴らしい道で、  
キリストの贖いのみわざに結ば  
れるよう召されています。女性  
は教会において大きな役割を  
担っているのです。福音のうち  
に、マリアの崇高な姿のうち  
に、このことをはつきりと理解  
することができます。  
(九四・六・二二)

「教皇様の声」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡 講義等を録音したものにそのま  
ま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部百八十円 (送料別) 一年予約 送  
料とも一〇五〇円から。詳しくは随時教育促進協会まで。

「救い主の母」3・5番参照)  
今日でもマリアの光は全世  
界の女性たちの間に輝い  
ています。今も昔も変わらぬ女  
性の問題を受け入れ、全ての人  
が女性の尊厳と権利を理解し、  
認めるよう導いてくれます。女  
性は特別の恩寵を受けていま  
す。その尊厳と使命において、  
神との契約のうちに生きるため  
の恩寵を受けています。一人ひ  
とりの道で、素晴らしい道で、  
キリストの贖いのみわざに結ば  
れるよう召されています。女性  
は教会において大きな役割を  
担っているのです。福音のうち  
に、マリアの崇高な姿のうち  
に、このことをはつきりと理解  
することができます。  
(九四・六・二二)